
賢者の予言

カズ～

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

賢者の予言

【Nコード】

N5196E

【作者名】

カズ

【あらすじ】

中世ヨーロッパを模したファンタジックな世界。滅び行く王政の序章。白と黒の賢者の予言は如何なる姿を見せるのか。

白の賢者、黒の賢者（前書き）

破滅と衰退を進むどんよりとした世界を三者視点から捉えています。
全体の大きな流れを数分割し、その分割したものを場面ごとに小さく区切っています。

白の賢者、黒の賢者

白の賢者、黒の賢者

―今は亡き二人の鬼才と謳われた賢者。

―二人の賢者は予言書を記した。

「何だこれは!？」

バンと1冊の適当に紐で止めただけの紙の束が床に投げつけられ、大きな音を立てる。

ここは世界でトップを誇る王国であり、王の寝室。

部屋には4人の男。

一人はベッドで伏せている。

一人はそのベッドの横で伏せる人物を心配そうな目で見ている。

白と黒のコートでフードを深く被った二人の男は寝室の入り口のところで立っている。

「予言書でございます。」

白いコートの賢者は言う。

「予言書だと!?!ふざけるなアルド!『世界が滅ぶ』だ!?!何の証拠があつてこんなもの?!ゴホツゴホツ」

「こ、国王ついけません。そんな無理をなさつてはっ。」

部屋に居る4人目の人物。

正装を身に纏った初老の男。白髪交じりの頭髪は短く上品に切りそろえられ、丁度オールバックのように後ろに流れてあり、頭髪によく似た色のお髭が生えている。体つきこそ細いが眼光は鋭く、漂う雰囲気は大臣としての器を感じさせる。

「う、うるさい大臣!おいアルド!今の世をしてみる!この平和な世の何処にその様な兆しがあるというのだ!」

「直ぐに滅ぶわけではない。」

しかし答えるのは白き賢者ではない。

「何世紀後か、何十世紀後か…。それは定かではない。例えば明日そうなるとしても、それを我々が知るすべはない。」

白き賢者の横に立つ…黒き賢者。

黒き賢者は続ける。

「ただ、国王の望む『永遠の発展』とやらは永遠の希望であり、その希望はやはり永遠であるということ…。」

「貴様も言うかウエイス！」

「そう言っても変えることは出来ない。予言は予言。我々ができることは、世界を代表する二人の賢者が観測を誤った。そう信じることのみ。」

「何の確証があつての話だ！？」

「お言葉ですが国王、形あるものの崩壊は道理。どんなに栄えた国であつても衰退するのもまた道理でございます。丁度国王のお体のように。」

国も内部ではキズが蓄積されていて、それは世界も同様である。と付け加える白の賢者。

「つく…もういい！下がれ！」

「はっ、失礼します。」

と白の賢者。

「…失礼。」

と黒の賢者。

ここはとある栄えた王国。そして王の寝室。

部屋には2人の男。

一人はベッドで伏せている。

一人はそのベッドの横で伏せる人物を心配そうな目で見ている。

「…国王、ご心配なさらずに。たかが予言でございます。」

「…大臣よ、思えばあの賢者達は邪魔な存在であつたかのように思えて仕方がない。」

「と、言われますと？」

「評議会の決定した政策に異議を唱えるのはいつもあの二人だっ

た。」

「おっしゃる通りでございます。国王。」

「だが彼らの異論は常に現実のものとなった。」

「…おっしゃる通りでございます。国王。」

「彼らが居なかったならば現実は何様になっていただろうか。」

なあ、大臣よ。」

「私は賢きものではございません。農民出の一般人でございます。そのような難問にはお答えできるほどの器量は持ち合わせていませんが…一つ言わせて頂けるのであれば、彼らは、いえ、彼らの力は人外のもの。それを持つ彼らもまた人に非ず…でございます。」

「…かもしれぬ。大臣よ。私がこのまま病気で伏せていたら、わが国は如何様になるだろうか。」

「……非常に申し上げにくいことではございますが。」

「構わぬ。」

「…予想される次の国王はフォレンシア王子ですが、まだお若い故、国政には不安が残ります。それ故内乱、外乱。勢力争いに権力騒動。統治者の居なくなった国民の心は乱れ荒むでありますよう。」

「仕方があるまいか…それも掟。18代続くルールだ。」

「…賢者共の持ってきた『予言書』とやらには何が書かれている？」

「……国王の亡くなった今年に内乱、それが収まることなく翌年には外乱、虚報と疑心に満ちた国内は血で血を洗うことになるだろうと…。」

「…そうか。人の命など、儚く、人の運命など悲しいものよ。」

「…おっしゃる通りでございます。国王。」

—大臣よ、国政は任せる。息子を上手く手伝ってやってくれ—

白の賢者、黒の賢者（後書き）

歌のような小説を書きたいなと思い、書いてみました。

全体のテンポに気を使ってみたのですが…、読まれた方、是非評価を下されると幸いです。

国王逝去〜王子の意志（前書き）

本来は『国王逝去』と『王子の意志』は別の話なのですが、文字数の関係でまとめて投稿になりました。

『〇』で題名を分けています。

国王逝去／王子の意志

○国王逝去

11月21日。6日経った朝のことだった。

アリエテンヒルム18代国王 病により逝去。

「…黙祷。」

昼から行われた葬儀はその大臣の一言によって締められた。

「王様…。」

国民は嘆き悲しみ、

「あなた…。」

王妃の右目には一条の涙、

「父上…。」

王子の左目には一条の涙、そして

「…フフ。」

將軍という二つ名を持つ中年の男の口元は不気味に緩んでいた。

○王子の意志

「…フォレンシア王子。お辛いのは分かります。ですがあなた様は正式な時期国王…これより国をお納めになるべきお方でございます。」

正装を纏った初老の男はとある豪華な扉の前。凜とした姿勢を保ったまま扉の向こうにいる男…否、男児に向かって言葉を投げる。

「…。」

しかし扉の向こうから返事はない…。

無理もない…。

初老の男は思う。

―フォレンシア王子。現王妃4度の死産の末、誕生。王権を継ぐ唯一の存在。

4度もの死産を経たため、誕生は奇跡と称され、王国を支持する数多くの詩人によって誕生が祝われた。

温和で心広く、どんな些細な争いも好まない性であり、運動は苦手だが乗馬に優れ、なによりも勉学が特出していた。だが少々無邪気な面も見られ、学者界では『未だ国王の器無し』というのがメジャーであった。

そのような時に突然の父親の死。

だが、その死は同時に時期国王の誕生も意味する。
若干14歳の男児には重過ぎる現実。

受け止めきれずに悩むのも無理はない。

「…戴冠式は来週に延ばしましょう。夕刻6時頃にお食事をお運び致します。どうか食事だけは食べてくださるよう…。失礼致します。」

大臣が一つの結論を出し、立ち去ろうとしたその時、豪華な扉は開いた。

「…心配をかけたね、僕は明日19代目国王となる。」

大臣は己の耳を、目を疑った。

ついこの間まで床に伏せた父の姿を見て朝まで泣いていた少年が、よもやこのような凜とした表情を見せるとは。

「―やはりあなた様は国王の器をお持ちでございます。明日の戴冠式では学者共の肝をつぶして差し上げましょう。国王。」

厳密には国王ではない。

だが少年の眼には先代国王のそれと同じ光が宿っていた。

国王逝去／王子の意志（後書き）

やはり歌を聴いているような小説を目指したつもりです。読みにく
かったらごめんなさい（´・ω・｀）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5196e/>

賢者の予言

2010年10月11日03時54分発行